

国の登録文化財として答申される

平成23年12月9日に開催された国の文化審議会において、あしびなー公園内に（うちなあ家として）移築復元された「旧目取真家住宅の主屋」と「旧崎原家のふーる^{おもや}」が国の登録文化財として文部科学大臣に答申されました。（今回の登録で、沖縄県の登録件数は75件となる。）



▲旧目取真家の主屋



▲旧崎原家のふーる

○登録有形文化財（とうろくゆうけいぶんかざい）とは、

1996年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことである。登録対象は当初は建造物に限られていたが、2004年の文化財保護法改正により建造物以外の有形文化財も登録対象となっている。登録物件は近代（明治以降）に建造・製作されたものが主であるが、江戸時代のものも登録対象になっている。

かつせきせいしなべ

滑石製石鍋（爪で削ることができる石）

北谷町文化財展示室 展示資料（1）

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
TEL 936-1234(内342)

皆さんは石鍋と聞いて何を思い浮かべますか？韓国料理の石焼ビビンバ鍋！

今回は、私達が住んでいる北谷町の後兼久原遺跡^{くしかにくばる}などから出土する滑石製の石鍋について紹介します。

遺跡より発掘された石鍋のいくつかの破片には、表面にススが付いており、煮炊きの道具だったと考えられています。

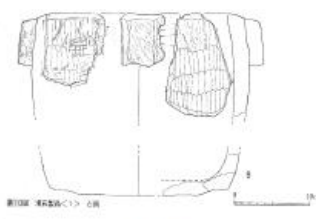
沖縄県内では滑石が取れないのですが、後兼久原遺跡では約900年前（平安時代）の鍛冶を行っていたと考えられるムラ跡から出土しており、これらは滑石の一大産地の長崎県西彼杵半島から持ち込まれたものと考えられます。

滑石とは、鉱物の中で最もやわらかく加工しやすい石材（硬度1）のことで、それを鍋状にくり抜いた容器が滑石製石鍋と呼ばれ、保温性に優れ鍋に適した素材であります。

沖縄県内では滑石がとれないため、高級品だったのか滑石製石鍋3個＝牛1頭と交換したという話もちらほら・・・。



▲滑石製石鍋方



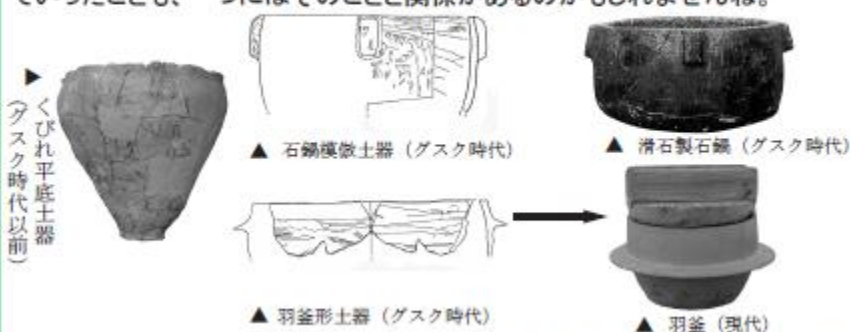
▲実測図

文化財資料室 展示（２）
＝鍋や羽釜の形をしたグスク土器＝

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
TEL936-1234（内342）

今回はグスク土器について紹介します。グスク土器とは、グスク時代（12～15世紀頃）に使用されていた土器の総称で、グスク時代以前には鉢形の土器が一般的だったのが、グスク時代になると鉢形から鍋形へと大きく変化するのが特徴です。鍋形の土器には、1月号で掲載した『滑石製石鍋』を真似たものや、現代まで使用されていた羽釜（炊飯器）に似たものがあります。煮炊きに便利な鍋形の土器は瞬間に流行し、北谷町の遺跡からも出土しています。沖縄県内では滑石が採れず、身近にある土を代用して模倣土器を作り出した先人達の知恵に、ただ驚嘆するばかりです。

また、北谷町ではこの時期の小堀原遺跡から炭化米、後兼久原遺跡からは畑の畝や鋤の跡が見つかり、イノシシや魚などを捕ったりする生活から米などを栽培する生活へと変化していることがわかりました。土器の形が急に変わっていったことも、一つにはそのことと関係があるのかもしれませんが。



※滑石製石鍋『博多51』1996年福岡市教育委員会より

（後兼久原遺跡）文化財資料室 展示（３）
＝北谷へ伝わった鉄＝

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
TEL936-1234（内342）

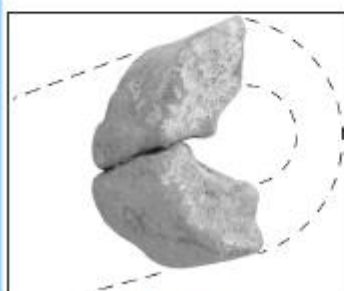
北谷町役場の南東側にある後兼久原遺跡から、約900～800年前の鍛冶屋らしき跡が見つかりました。そのことにより、石を研（と）いで使う石器の時代から、鉄を加工して農機具（鎌、ヘラ、鋤）や漁具を作る鉄器の時代に移行してきたことが確認されました。

遺跡からは、鍛冶炉は確認されていませんが、焼痕をもつ炉の付近から、鉄器を作る際にでる鉄滓（鉄の塊）や鉄小片、炉に強風を送り込む為の竈（送風機）の羽口（管）が多数見つかりました。鉄製品は刀子（小刀）、鋸、鋤などが出土し、他に砂鉄貯蔵穴も三基発見されました。

砂鉄が穴に貯められた状態での出土は、県内では初めてのことです。

又、本遺跡で鍛冶がなされていた裏付けとして、炉跡付近から発見された成人男性の埋葬人骨があります。その男性の右腕が異常に太いことから、長い間金槌を振り、鍛冶労働に従事していた人の可能性があると考えられます。

さらに、本遺跡からは、畝をもつ畑の跡がみつかっています。鍛冶の技術により、鉄鋤などが使われるようになり、難儀な畑作業も楽になったであろうと想像できます。



▲羽口



▲磁石にくっつく砂鉄



▲砂鉄の貯蔵穴

文化財資料室 展示（４）

＝染付の絵柄について＝

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
Tel.936-1234(内342)

今回は染付について紹介します。染付は、碗や瓶、皿等に呉須^{ごす}と言われる藍色顔料(酸化コバルト)を用いて素地に絵模様を描き、その上に透明釉を掛けて焼いたもので、中国では染付のことを「青花^{せいひや}」とよんでいます。町内からは14～17世紀頃の染付が出土しています。

染付の基本文様には、波の持ち上がった頭部が激しく巻き込まれていく形を描象化した波頭文様。蔓^{つる}の上に花や葉を配し一定のリズムでカーブを繰り返した唐草文様。焼き物の肩や胴の下部に蓮の花弁をもじり中心部に突出部を持つ飾文様が連続して描かれている蓮弁文様の3種類があります。染付には、基本文様に牡丹や菊といった花の文様や梅木や芭蕉の樹木の文様、龍や獅子といった獣の文様や山水文や雲を描いた風景の文様などを組み合わせる絵柄にしたものが見られます。

北谷町から出土した染付を見ると唐草や花の文様が描かれたものが多いことから、好んで使われていたと思われます。

このようにいろいろな文様がありますが、どの絵柄が好みですか。



▲瓶（中・牡丹唐草文
下・ラマ式蓮弁文）
伊礼原D遺跡出土



▲碗（下・蓮弁文）
北谷城出土



▲波頭文様



▲唐草文様



▲蓮弁文様

※参考文献：陶磁器染付紋様事典

平成24年2月23日「北谷町うちなあ家」の旧目取真家住宅主屋と
旧崎原家住宅ふーるが国の登録文化財として官報告示されました。

文化係資料室 展示(5)

＝北谷にもあった！中国の青磁＝

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
TEL 936-1234(内342)

今回は青磁について紹介していきます。

青磁は、中国で作られた焼き物で、鉄分を含む青緑色の釉薬を掛けて焼いた磁器です。

北谷町では、北谷城跡、伊礼原D遺跡、後兼久原遺跡(現北谷町役場)などグスク時代(今から800～500年前)の遺跡から碗、皿、盤、瓶、鉢、酒会壺などが多く発見されています。

文様にも種類があり、蓮の文様である「蓮弁文」、ラーメン鉢に見られるような「雷文」などの文様があります。北谷城では香炉や、杯が発見されていることから、グスク内の拝所で祭祀において使われていたと思われます。伊礼原D遺跡(かねひで美浜店向い)では、首里城跡や今帰仁城跡など按司(首長)がいる場所で発見された青磁が出ています。城ではなく平地(集落)から出ていることから、当時の王府であった首里からもたらされたか、また特別な場所だったのかもしれませんが。また、全国でも首里城跡でしか発見されていない高級な「双耳瓶」(写真)や、獅子型をした酒会壺の蓋の摘み(写真)も出土しています。青磁は、グスク時代の交易、流通を考えるうえで重要な資料のひとつです。

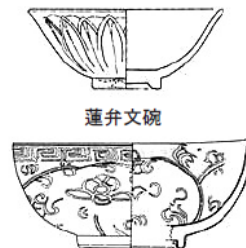
双耳瓶の耳(伊礼原D遺跡) 獅子型の蓋の摘み(北谷城)



「双耳瓶」



「酒会壺」



蓮弁文碗

雷文帯の鉢

首里城京の内(2001年)

文化財資料室 展示(6)

厨子(ジーシ)・厨子甕(ジーシガーミ)

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
TEL 936-1234(内342)

火葬のない時代沖縄では遺体を墓室内に安置(風葬)し、その後親族が骨を洗う「洗骨」が行われました。洗骨後の骨を納める蔵骨器を厨子甕といいます。

一つの墓の中に様々な厨子甕が並ぶ独特の風習、厨子甕の材質や形態・文様・装飾もさまざま、家形をしたサンゴ石灰岩などの石厨子やシャチホコをのせた御殿型のもの、飾りのない甕形のものもあります。

御殿や瓦葺家を模った厨子甕は死者の永遠の住処であり、今生において果たせなかった夢の実現でもある。描かれた文様には魔よけなどの意味があり、さまざまな想いが込められています。厨子甕の正面やフタの裏には銘書き：墨で氏名や死亡年月日、又は洗骨年月日を記したものが、それが厨子甕の編年や人々の歴史を読み解く重要な資料になります。

戦後昭和30年以降は法令の改正により沖縄本島では火葬が徹底され小型の骨壺が使用されるようになり、厨子甕の需要が少なくなっているそうです。

【夫婦は甕ぬ尻一つ】ということわざがあり、夫婦は同じ厨子甕に葬るという習慣もあったようですが、死後の家はどのような形？模様は？夫婦で入る？

思いを巡らせてみるのも面白いのではないのでしょうか。



▲石厨子



▲ボージャー厨子



▲赤焼御殿型



▲マンガン掛け厨子甕



▲上焼御殿型

北谷にもあったパナリ焼

今回はパナリ焼について紹介します。

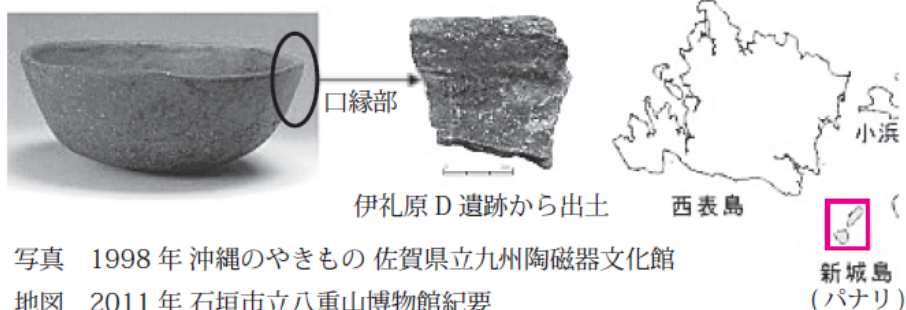
パナリ焼とは八重山諸島の新城島で 1857 年頃まで作られていた土器質の焼き物で、文様や装飾はほとんど無く、豊かな丸みをした素朴な形をしています。新城島では水甕、壺、鍋、鉢などの日用品としてパナリ焼が作られていました。

パナリという名前の由来は新城島は上地島と下地島に分かれていて、それを「離(パナ)り」と呼んでいたためです。

新城島には良質な粘土が無かったと思われ、その製法は他の土器とは少し変わっていて、粘土にタブノキ、ツル草、かたつむり、貝肉などを混ぜ、その粘液を利用して手びねりで形を整えて、カヤヤススキの火で低温でゆっくり焼き上げます。

実はこのパナリ焼、「支那(中国)人が伝えた」「島民が自ら考えた」という説があり、誰がこの製法を伝えたのか、はっきりとした事は未だにわかっていないのです。

そんな不思議なパナリ焼は、北谷町の伊礼原 D 遺跡でも発見されており、琉球王府時代の北谷の人々にも届いていたという事が分かります。どのように流通し北谷の人々はこのパナリ焼を使っていたのでしょうか。



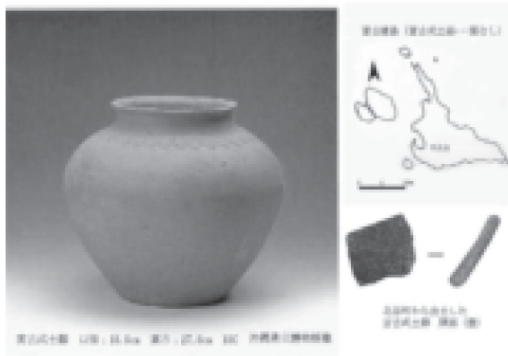
文化財資料室 展示 (8) 宮古式土器

今回は、宮古式土器を紹介します。

宮古式土器とは、沖縄県宮古島で 13 世紀頃から 18 世紀にかけて作られた土器のことで、北谷町伊礼原遺跡からも宮古式土器(胴部)が出土しています。

宮古式土器は新しいものと古いものに分けられます。

古いものは、近世以前のもので、粘土紐を巻き上げか輪積みで成形し、表面はヘラでなでられているものが多く、器種はおもに壺や鉢で、文様は見られません。一方、新しいものは、紐作りと回転台を併用し作られ、最初に粘土紐の巻き上げや輪積みを行い、ヘラで荒い調整をしたあと回転させて表面を仕上げています。器種には壺、浅鉢、大甕や炉があり、肩には繊細な波状の櫛目文が施されるものも見られます。



当時窯はなく、枯れ草などで覆って焼いたと考えられ、焼成温度は低く、800 度以下ぐらいと推測されています。宮古島は最高標高: 115m と低平で、山が無く陶器に適した土がないため宮古島では土器が作られたと思われます。

沖縄諸島では宮古式土器に類似する土器が近世の墓などから出土しています。約 300 年前に海をわたり沖縄本島に持ち込まれたと考えられます。

参考文献

- 『沖縄のやきもの—南海からの香り—』佐賀県立九州陶磁文化館 1998
- 三辻利一・西銘 章 「沖縄県内出土土器の蛍光 X 線分析」『南島考古』第 31 号 沖縄考古学会 2012

文化財資料室 展示(9)

カムイヤキ(須恵器)

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
TEL 936-1234(内 342)

今回は、カムイヤキ(須恵器)について紹介します。

「カムイヤキ」は、土器と異なりロクロを使って成形し、窯で高温にして焼いてつくる固い焼物です。黒みがかった灰色をしていて、壺、甕、鉢、碗などがあります。

「カムイヤキ」は、1983年鹿児島県徳之島の伊仙町で、古窯跡(こようあと)が発見され、「亀焼・カミイ焼き」の事を地元では、「カムイヤキ」と呼ぶようになりました。

「カムイヤキ」は、古窯跡の発掘調査の結果、11世紀から13世紀にかけて徳之島で生産され、南西諸島一帯から南九州に及ぶ広範囲に流通していました。この時代に焼き物とおして交流をしていたことがわかります。

九州以北では、須恵器という焼き物がありますが、須恵器と似ているものの、多少焼き方や時代が違うのでカムイヤキとよばれています。

私たち、北谷町でも、後兼久原遺跡・伊礼原遺跡などからカムイヤキが出土しています。生活品として使われていた他に、小堀原遺跡にグスク時代のお墓に人骨とカムイヤキと一緒に納められて(頭部横)検出されました。この時代に身分の高い人の副葬品として使われ、貴重な物だったのかもしれない。



小堀原遺跡 出土のカムイヤキ



小堀原遺跡 人骨とカムイヤキ

文化財資料室 展示(10)

「夜光貝で作った貝匙」 かいざし

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
TEL 936-1234(内 342)

奄美諸島以南、熱帯西太平洋に広がるサンゴ礁の美しい海で育った夜光貝、殻径は20cm・重さ2.5kgで大型の巻き貝です(世界最大のサザエ類)。殻・蓋とも重厚で、貝殻の内側は青く虹色に輝く真珠層で出来ています。

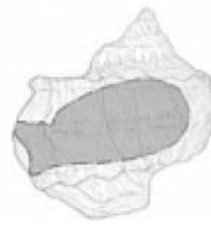
琉球王朝時代には、食用としてはもとより、磨くことによって変化する色彩が美しいことから、螺鈿細工(らでんざいく)の材料として様々な加工を施した器や装飾品として幅広く利用されてきました。

その中のひとつ、貝匙は夜光貝の丸みをなす、貝の背面の側面部分から穴を開けて殻を切り取り、外側は緑色の表層まで磨いて光沢を出し、柄の部分は細くくびれをなしています(右図の部分を使います)。

匙の形、貝塚時代後期のものは柄のモチーフが変化に富んでいて、グスク時代になると小ぶりになり殻表をはいで真珠層のみが用いられています。

町では近年の調査の進む、キャンプ桑江北側地区で貝塚時代後期の遺跡から十数点出土し、グスク時代以後としては町内にある300年前の墓からも発見(1986年)されています。

夜光貝の匙は貝塚時代後期のころから、沖縄の人々と深い関わりをもっていたと思われます。



夜光貝製・匙状製品

参考文献・清水貝塚遺跡

遺跡から出土する骨製品の素材には、海に棲むジュゴンやクジラ、ウミガメなどもありますが、今回は陸地に棲むイノシシの骨を取り上げてみました。

先人達は、肉を食べた後の骨をポイッ！と捨てることなく、生活の道具としても利用していました。

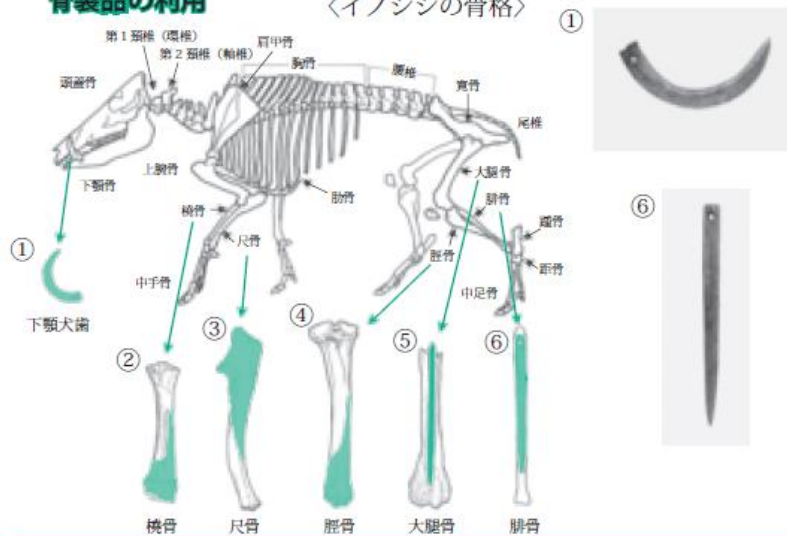
図は、北谷町内にある伊礼原遺跡から出土した骨製品をイノシシの骨格と照らし合わせた図です。①は牙ですが、おしゃれにペンダントへと変貌を遂げ、②～④は骨製のキリです。密度の濃い部位（四肢骨等）を用いて、縦位に半裁し尖らせています。⑤・⑥はなんと骨針です！⑥に至っては上端部に小さな孔まであけ、先端を尖らせるという巧妙さは圧巻です。

その他、へら状に加工したものや棒状に加工したものなど、イノシシだけでも多様な加工がなされ、生活の一部として利用されていた様子が窺えます。

このように、製品として生まれ変わった骨製品は、北谷町役場敷地内にある北谷町文化財展示室に展示してあります。どうぞご覧になって下さい。

骨製品の利用

〈イノシシの骨格〉



役場のすぐ隣で平成 17～20 年度にかけ発掘調査が行われました。その遺跡名は、小堀原遺跡と言います。

遺跡の貝塚時代後期（約 2,000 年前）の層から不思議な石が出土しています。

その石は、黒曜石と言う名前の岩石で、楔形（くさびがた）に加工しています。

黒曜石は、ガラス質で硬いけれど加工しやすいのが特徴で、現在の楔の形に似ているため、昔も同じ使われ方をしていたのでは？とされています。この石器の表面にリング状となつて丁寧に整えられた痕が窺えます。

沖縄ではもともと採れない石で、今回の調査で九州から運ばれて来ているのではないかとこの見解を得ています。

長さ 1.8cm、幅 1.7cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.36g と小型の石の道具です。

まだまだ県内の遺跡からの出土例が少ないことから、九州との交流を考えるうえで貴重な石材のひとつに挙げられます。



楔形石器

文化財資料室 展示（13）

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234（内 342）

「炉趾（ろあと）＝昔の台所＝」

今回は、炉趾を紹介します。

伊礼原 E 遺跡の調査時に標高約 3.0 m の砂丘上から検出された長軸約 3.8 m、短軸約 2.7 m の楕円状で、ほぼ全面が石灰岩礫（れき）である。

その礫は、拳大のものから 40 ～ 50 cm 大のものと様々で、底面はやや平たく、大きいものほど外側に集中しており、お椀状に配石されている。淡黄色のものも見られるが、ほとんどは火を受けた事により、淡灰色もしくは淡赤褐色になっている。

炉趾の周辺に柱穴などはみられず、屋外炉の可能性が高い。

炉の 2 箇所で広葉樹のヤマグワが炭化され、いずれも 1.5 cm 程度の破片であり、観察した範囲では何らかの人間活動により、火を受けたと推定される。

炭をサンプル資料にした年代測定結果により縄文時代後期のものである。

この炉を囲んで、家族だけではなくご近所共に宴を楽しんでいたのではないのでしょうか。



◀ 炉趾

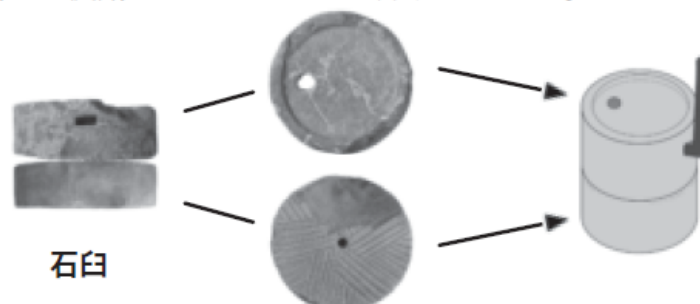
文化財資料室 展示（13）

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234（内 342）

「遺跡から出土した石臼 いしうす」

北谷町役場のそばにある小堀原（くむいばる）遺跡から、石臼が見つかりました。石臼は、主に豆腐作りに使われ、大豆を粉にする道具です。年配の方なら多分ご存じだと思いますが、子供達や若い人達はあまり知らないのではないのでしょうか。便利な世の中になって、石臼も他の道具に取って代わられました。このように、小堀原遺跡からは近・現代まで使用された道具も出土することから、今月は石臼を紹介します。

見つかった石臼は直径が 30cm 以上、厚さは 10cm 以上、重量は 20kg 前後の円柱形で、上下の臼を重ね合わせて使用します。重ね合わせる面には籠目（かごめ）状に浅い溝が彫（ほ）られ、豆類が摺（す）りやすいように工夫されています。上の臼には材料を入れる円形の穴や、棒を差し込む穴があり、その棒を手で回しながら挽（ひ）きます。石臼の見つかった小堀原遺跡は、『北谷町の地名』によると桑江ヌ後屋取（クエヌクシヤードウイ）の旧部落があった場所にあたり、その頃の人々が使用していたものかも知れませんね。



石臼

文化財資料室 展示（15）

= 「龕（がん）」 =

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234 (内 342)

今回は展示室の民俗資料「龕・がん」について紹介したいと思います。龕とは亡くなった人をお墓に運ぶための御輿のようなものです。亡くなった人の遺体を龕に乗せ親族で龕を担ぎお墓まで運びますが、それを野辺送りと呼びます。

龕は当時、部落のガンヤーという場所で保管され共同で使われていました。亡くなった人を、あの世へ無事に旅立たせるため龕の色彩は朱色で彩られ、お坊さんや蓮の図柄が描かれています。

遺骨の埋葬には土葬、風葬、火葬とさまざまな方法がありますが、戦前までは人が亡くなると埋葬方法としてお墓の中に遺体を収め、三年後にお墓から遺体を墓庭へ運び出し、骨を洗骨したあと厨子甕などに再び納めるというものでした。お葬式や埋葬に関する儀式には地域ごとに異なった細かいしきたりが数多くあります。

現在のように亡くなった人を火葬する習慣はまだ新しく当時は死者を親族、門中の人たちで手厚く葬る儀式として、とても重要なものでした。

昭和30年以降、法改正により火葬が行われるようになりますが、離島など火葬場がなく本島まで火葬に来ることが大変な島では現在も昔ながらの埋葬方法が執り行われています。



文化財資料室 展示（16） 「柱穴」

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234（内 342）

遺跡からは、昔の人が使っていた色々な遺物が出土しますが、その他に多数の柱穴の痕跡が検出されています。

北谷町役場庁舎と場所的にほぼ重なっている後兼久原遺跡からは、12～13世紀を中心とするグスク時代の集落と思われる貴重な柱穴が検出されました。

写真1は、平地式住居跡と高床式倉庫跡が二つセットになって検出されたものです。このような建物は5～6棟みつけられました。平地式住居跡は、縦約4m×横約6mの長方形で、中央に2本の太い中柱をもち、周辺に32本の柱をめぐらし住居としたものです。煮炊き用の炉跡（現在の台所）が内側に一つ、外にも一つ炉跡があることから家事による使い分けがなされていた事がうかがえます。

高床式倉庫跡は縦約1.5m×横約3mの大きな4本柱で、深さが50～60cmとかなり深いことから写真2のようなどっしりとした倉庫だったと想像できます。この近くからは、鍬痕をともなった畠址もみつかることから米や穀物などを貯蔵する倉庫であったと思われます。この高床式倉庫跡は、写真2の高倉と類似しているもので、現在「うちなあ家」に復元展示されているので是非ご覧下さい。

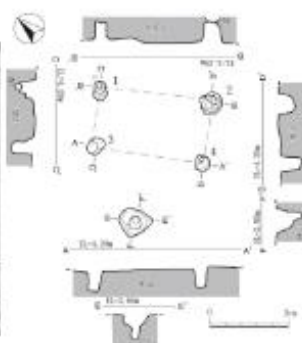


写真1：上空からみた柱穴

高床式倉庫跡の平面図と断面

写真2：うちなあ家の高倉

文化財資料室 展示（17）

＝「グスク時代の埋葬人骨」＝

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

現在の北谷町役場の後方、後兼久原遺跡では住居址の下層から、約800年前のグスク時代の埋葬人骨が4体発見されました。そのうちの3体は成人男性、1体は幼児の人骨とわかりました。成人骨3体のうち1体は保存状態が良く、身長は推定156cmで低身長ながら骨体は頑丈で普通よりも右腕が太いことから腕力を使う仕事に従事していたと思われます。前に掲載された「＝北谷へ伝わった鉄＝」では、鉄製品や砂鉄とその貯蔵穴が発見され、鍛冶屋の裏付けも紹介されており、それに従事していた人の可能性があります。また3体のうち2体は木棺に収められ埋葬された痕跡が残っています。

幼児骨も保存状態が良く4歳くらいと推定され、うつ伏せの状態ですべてを覆うように30cm大の石が乗せられていました。頭の方でも成人骨は南東方向でしたが、幼児骨だけ逆方向に向いていました。このような特殊な埋葬方法などから死因や死生観など、当時の「死者」に対する特別な思いが込められているように感じられます。

この4体の人骨は、一定の区域に並んで埋葬されていることから、一時期埋葬地域（墓地）として利用されていたことがわかりました。

なお文化財展示室には成人骨2体と幼児骨のレプリカが展示されています。



右腕の太い成人骨



幼児骨（石除去前）



幼児骨（石除去後）

文化財資料室 展示（18）

＝「天目茶碗」＝

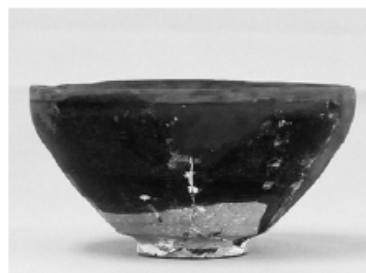
北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

今回は、天目茶碗を紹介します。町内の遺跡からは「北谷城」や「伊礼原E遺跡」から破片が数点出土しています。

天目の名称は、宋代（約600年前）に福建省にある建窯（けんよう）で焼かれた茶碗に対する日本の呼び方で、中国の禅僧寺院に留学していた僧侶たちが持ち帰った喫茶用の茶碗を天目とよんでいて、その語源は浙江（せっこう）省にある天目山に由来しています。

天目茶碗は黒釉（黒い釉薬）がかかった陶磁器で、すり鉢のような形の黒色の茶碗で、釉は、鉄を主成分とし、わずかに褐色がかかっていて、白っぽい斑点状の模様が無数に入っています。特に有名な曜変（ようへん）天目茶碗（国宝）は、数点しかなく貴重なものとなっています。

茶碗とともに僧侶たちがもたらした茶の文化は、日本の上流階級の人々に広く受け入れられて、とくに佗茶（わびちゃ）（茶の湯）の世界で愛好されました。さて、古（いにしえ）の沖縄の人々もお茶を楽しまれたのでしょうか。



天目茶碗（北谷城出土）

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

文化財資料室 展示 (19)
＝「タイ産・鉄絵の合子(ごうす)」＝

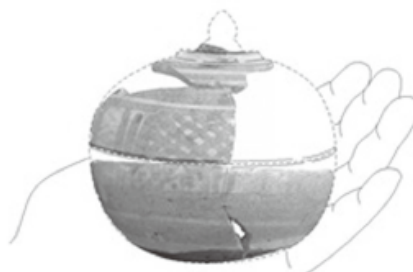
今回は北谷町の伊礼原D遺跡から出土したタイ産鉄絵の合子を紹介いたします。合子とはふた付きの小さな容器のことで、主に香合(こうごう)、化粧品入に使用されました。この陶器は『宋胡録(すんころく)』とも呼ばれ、その鉄釉独特の雰囲気江戸時代の頃、日本の茶道界で好まれ香合として珍重されました。

宋胡録は、タイ中部のサワンカローク窯で14世紀から15世紀に焼かれ、『すんころく』の名はこのことに由来します。

14世紀から16世紀頃の琉球王国は、中国・東南アジア・日本との貿易の中継地として多くの文物が集まり、栄えていました。前回紹介の『天目茶碗』や合子などの茶道具は首里城や有力按司の城からの出土はみられますが、集落からの出土はあまり例がありません。このことは北谷町の豊かな文化を物語っているのかもしれないですね。



伊礼原D遺跡出土
(旧キャンプ桑江北側)



出土した破片をイメージ図にはめ込んだ画像
宝珠形のつまみがついていたと思われる。

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

文化財資料室 展示 (20)
＝「中国産三彩の水柱(すいちゅう)」＝

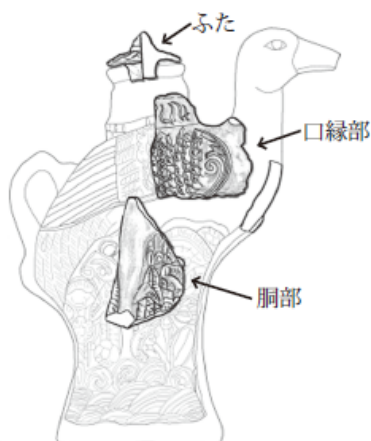
今回は三彩について紹介します。三彩とは唐時代の華麗な貴族文化を象徴する陶器で、水注とは水差しのことです。唐の時代につくられた物は「唐三彩」、明の時代につくられた物は「明三彩」といいます。

三彩の特徴は、厳選された白い粘土と無色透明の釉(うわぐすり)を基礎にして緑釉、褐釉、または藍釉を加えて色鮮やかで美しい焼物が生み出されます。

その用途は、貴族の墓におさめる副葬品、水注や壺等の生活用品として利用されてきました。唐時代は文化交流が盛んだったため、三彩は中国特有の芸術品として多くの国に輸出され、日本にも大きな影響を与えました。奈良県の平城京付近では唐三彩を真似て作製されたものがあり、これを奈良三彩といいます。奈良三彩は灰色や赤みを帯びた土を使用していたため

三彩本来の美しい色彩を表現する事は遂になかったそうです。

人々を魅了した三彩は首里城、今帰仁城、中城城からも見つかり、当時の按司(あじ)が使用していたと思われます。北谷町では伊礼原D遺跡から中国産の鴨型水注のふたと口縁部(注入部位)と胴部が見つかりました。口縁部には羽の模様、ふた、胴部には植物の模様、そして緑色釉が施されています。この鴨型水注も高価な物であり、なぜ庶民が暮らす集落遺跡から出てきたのでしょうか？



文化財資料室 展示（２１）

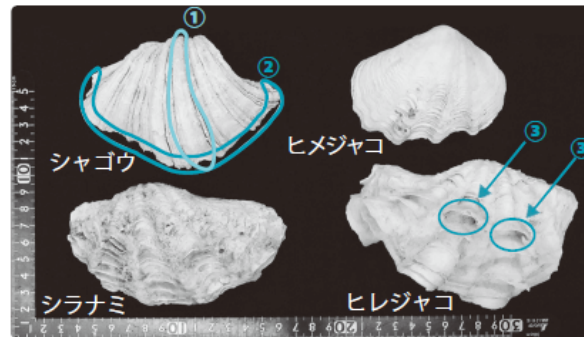
「シャコガイ類」

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

北谷町の遺跡からは、土器や石器のほか多くの貝類が出土しています。今回はその中から４つのシャコガイ類（シャゴウ、ヒメジャコ、シラナミ、ヒレジャコ）を紹介します。

シャゴウはサンゴ礁の砂地に転がって生息し、形はややひし形で肋（ろく、①）が多いのが特徴です。遺跡からは、縁（ふち、②）が割れた状態で出土するものもあり、これらは、お皿として使用されたものと考えられています。ヒメジャコガイは岩やサンゴに穴をあけて生息し、やや楕円形をしたシャコガイ類の最小種（最大で約15cm）です。取るのが大変な貝ですが、割れていない状態での出土が目立ちます。昔の人はどのような道具を使って取ったのでしょうか。シラナミはサンゴ礁の岩場に多く生息し、細長い形が特徴です。遺跡からはヒメジャコ同様たくさん出土します。ヒレジャコは枝サンゴの多い場所に生息し、うろこ状の突起（③）が鋭く立っているため、見た目に華やかな貝です。大きなものは40cmほどにもなりますが、出土数はあまり多くありません。

北谷町の遺跡からは多くの貝が出土していることから、当時の人々はおいしいシャコガイ類を取って食べていたのでしょう。



文化財資料室 展示（２２）

「縄文の最高級ブランド オオツタノハの貝輪」

北谷町教育委員会
社会教育課
文化係
Tel. 936-1234(内 342)

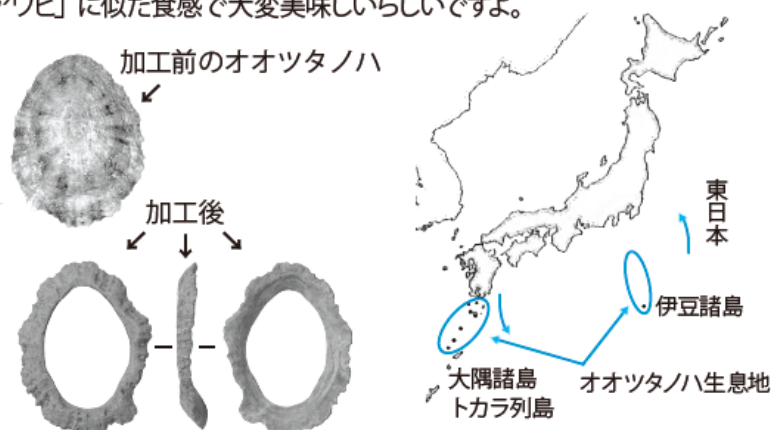
今回は、オオツタノハの貝輪を紹介します。

オオツタノハは、縄文時代や弥生時代に貝輪をつくる材料となった特殊な貝で、南九州の大隅諸島やトカラ列島のほか伊豆諸島南部に分布します。荒波の打ち寄せる切り立った岩に張りついて生息し、発見することもさることながら、採取するのも非常に困難なため「幻の貝」とも呼ばれます。

縄文・弥生時代の人びとにとって、採取困難な環境から命がけで得られた「幻の貝」の腕輪にはどのような価値があったのでしょうか。集落をまとめる人の「権力のしるし」だったかもしれませんね。

オオツタノハの貝輪は、北谷町の伊礼原遺跡・伊礼原E遺跡・小堀原遺跡からも数点見つかっています。沖縄諸島では生息していない可能性が高いことから、貝輪を作るために持ち込まれたと考えられます。

ところで、このオオツタノハの身は食べられるのでしょうか？実は「トコブシ」「アワビ」に似た食感で大変美味しいらしいですよ。



☆文化財資料室だよりパネル展☆

11月25日（月）～29日（金）

北谷町役場 1階 町民ギャラリーにて開催

「広報ちゃたん」において、連載中の「文化財資料室だより」の過去3年間の記事の中から、厳選した原稿をパネル展示し、その中で紹介した遺物等も併せて展示いたします。

また、「パネル展」開催期間中は、職員が常駐し、分かりやすく解説いたしますので、お気軽にお越し下さい。

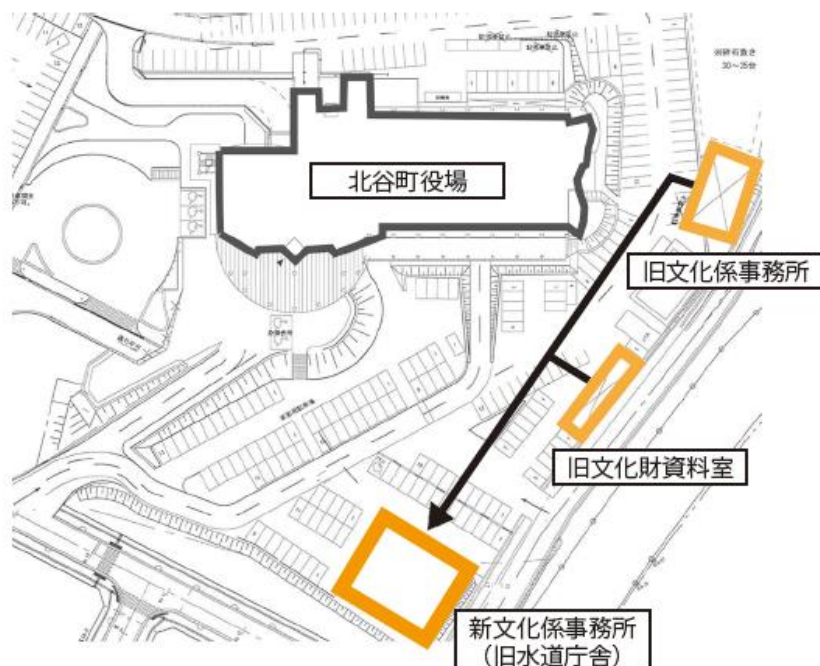


社会教育課文化係事務所移転のお知らせ

北谷町教育委員会社会教育課文化係よりお知らせです。

平成25年9月17日（火）より、水道庁舎移転に伴い、旧文化係事務所と旧文化財資料室を統合し、旧水道庁舎へ移転しました。

文化係へご用の際は、下図の新文化係事務所（旧水道庁舎）へお越し下さい。



●お問合せ 社会教育課 文化係 936-3159

文化財資料室 展示（23） 「日本最大の貝・ホラガイ」

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
Tel. 936-1234(内 342)

今回は日本一大きい巻き貝とされている、ホラガイを紹介します。

紀伊半島・八丈島以南のサンゴ礁の美しい海で育ったホラガイ。大きさは約40cmになり、全体に紡錘形(ぼうすいけい)をしていて内外ともに美しく光沢をもち、外面にはヤマドリ羽のような模様があります。雌が雄よりも大きくて太いです。

ホラガイといえば、あの山伏が吹き鳴らす「法螺の笛」が目につかぶでしょう。笛は、殻頂(細い方)を削って穴を開け、そこに口をつけて強く吹くとからの内側に共鳴して大きな音が響きわたります。仏教では、天神の善神を呼んで悪鬼を追ひ払うとして法要に用いられていたようです。

また、戦国時代には合戦の合図にも使用され「陣貝」と呼ばれていました。

沖縄地方では、民具として利用されました。貝の中央部に穴を開け、そこへ鉤状の木の枝を差し込んだり、縄を通して柄とし、いろいろの吊鉤にかけて、湯を沸かす「ホラガイやかん」又は「ブラヤックワン」と称され使用されていました。これで煮たお茶はおいしく、また内臓の病気を治す力があると言われていました。宮古や八重山では、戦後も畑小屋で使われていたそうです。

考古学資料のホラガイ製品は、ホラガイ有孔貝製品、匙状製品、鍋状製品、利器等があります。ホラガイ有孔製品や鍋状製品は「煮沸器」又は「容器」として報告されています。これら資料は奄美・沖縄では縄文時代後期まで遡られ、続く縄文時代晩期、弥生時代は多く、古く時代に入ると減少するようです。また、背面部に擦り痕がみられることから、大きな殻口を活かして柄杓の役割も果たしていたと推測されます。

今日では、サンゴ礁を荒らすオニヒトデの天敵としても活躍しています。



ホラガイの
湯沸し

参考文献 原色沖縄海中動物生態図鑑

文化財資料室 展示（24） 「^{せきぞく}美しすぎる石器『石鏃』」

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
Tel. 936-1234(内 342)

今回はチャート製の石鏃を紹介します。

石鏃は、弓矢の先端に紐などで固定して用いる石製の道具・武器の一種で、鏃(やじり)とも呼ばれており、主に狩りを行う道具として使われていました。

矢は獲物に放たれる性格上、消耗することが多く、縄文時代の石器の中でも最も代表的なものと言えるでしょう。しかし沖縄では県外と比べ出土数が少なく、九州からの持ち込みか?とも考えられています。

ここ北谷町においては、縄文時代の頃を代表する遺跡である国指定史跡伊礼原遺跡と伊礼原E遺跡から出土されています。

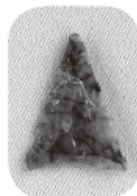
石鏃に使われる石材は、本土では黒曜石やサヌカイトなどを用いることが多いようです。県内では出土したものはチャートといわれる岩石が使われているものが多く、県内でも取れる石であり、伊江島、伊是名島、伊平屋島、本部町の一部で取れる貴重なものです。



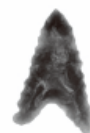
チャートの産地

石鏃は石塊(いしくれ)を打ち欠いた剥片(はくへん)を素材に細かい調整を加えて作ります。

古代の人々の生活の中で使われていた石鏃!現代の私たちが見てもその形状の美しさに目を見張るばかりです。



伊礼原遺跡出土



伊礼原E遺跡出土

文化財資料室 展示（25）

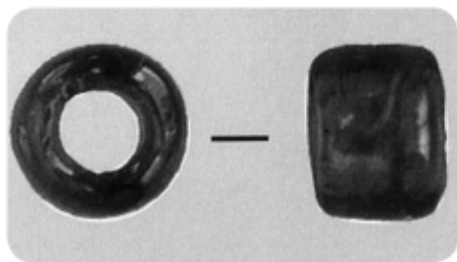
「ガラス玉」

北谷町教育委員会
社会教育課 文化係
Tel 936-1234(内 342)

弥生時代から古墳時代にかけて使用される装身具や祭具にガラス玉（ビーズ玉）があります。ガラス玉は本土や沖縄では作ることは出来ず、弥生時代に大陸から九州を通して沖縄に交易品として入ってきました。交易で取引されていたのは、貝製品（腕輪）の素材となるヤコウガイやイモガイと思われます。

町内ではこれまでの発掘調査によって、古墳時代の集落跡から2遺跡、城跡から1遺跡の計3遺跡で見つかっています。集落跡では、小堀原遺跡よりガラス玉の完形2点（写真1）破片1点です。完形の2点の色はシアンブルーで光沢があって、大きさと形が似ているので連結してネックレスにしていたと思われます。残りの破片の1点は、出土した場所も違い、光沢もないので貝塚後期（弥生時代）～古墳時代の古い時期のものだと思われます。次いで後兼久原遺跡では、小さめのガラス玉が4点出土しています。完形品ですが、透明度を保っているのは1点のみです。その他に「ガラス」の勾玉（写真2）1点が見つかっています。このことから、祭具に使用されていたと思われます。城跡からは、北谷城より、青緑色で光沢もない古いタイプのものが1点見つかっています。

このように集落遺跡や城跡から見つかっているガラス玉は数が少ないことから、使用していた者は集落の長（おさ）や有力按司などと祭祀に関わる者が身に付けていたと考えられます。



（写真1）ガラス玉（径 9mm）



（写真2）勾玉（縦 38mm）